みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

歴史の中のストリートとトランスローカリティ：歴史と記憶を生きる眼差しから見る現代の場所性：変容するローカルな場所性とせめぎ合う眼差し：記憶と現在の間：ストリートとストリーム：ポリネシアでストリート現象を考えるための覚書

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 棚橋, 訓 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001211

関根康正編『ストリートの人類学』下巻
国立民族学博物館調査報告　81：261－269（2009）

ストリートとストリーム
ポリネシアでストリート現象を考えるための覚書

棚橋　　訓
お茶の水女子大学

19 世紀以降のヨーロッパ列強の植民地支配は，海による「孤立」・「隔絶」・「分断」を通じてポリネシアの島世界を権力空間の周辺に位置づけた。一方，ポリネシアの島世界では，祖先たちが広大な海を乗り切った過去を想起しながら，個別の島景観を越えたグローバルな移動と拡散の連続に基づくストリームの歴史認識を形成してきた。「海に生きるつながり」を核とするストリームの歴史認識は 1970 年代以降のポリネシアの伝統復興運動においても重要な役割を果たした。しかし，この歴史認識は 1960 年代以降の海外出稼ぎ労働移民の存在に由来するような，「引き裂かれたまま」に「海によってつなぎとめられた」もうひとつのストリームの歴史の現実と対照しながら理解される必要がある。以上の考察を経て，本論では，ポリネシアで「ストリート現象」を捉えるために見据えるべき場は，島上に偏在するストリート空間ではなく，海のストリーム空間であることを見いだした。また，複数のストリームの歴史認識が交錯する「海続き」の景観を複視の作法で捉える必要性を主張した。

1　ストリートの来歴
2　ストリームの歴史認識
3　労働移民
　——もうひとつのストリームの歴史
4「海続き」の光景と複視

キーワード：ポリネシア，ストリームの歴史認識，海に生きるつながり，労働移民，複視

1　ストリートの来歴

南太平洋ポリネシアの島世界におけるストリート，それも物理的空間としてのストリートの来歴はどのようなものなのかという問いからこの小論を始めたい。ポリネシアと呼ばれる地域の島々の規模はまさに大小さまざまである。ニュージーランド，ハワイ諸島，トンガ，サモア諸島など，比較的大型の島々があれば，その周辺には長径が数十メートルに満たない環礁州島によって成り立つ極めて小規模な島々の世界がある。ニュージーランドのオークランド市やハワイ州オアフ島のホノルル市のようにストリートが交差する条里が中核を成す空間と景観が存在する一方で，周辺の小さな環礁州島には日常的な感覚でストリートと呼ぶことが適当と思われるような物理的空間自体が存在しないことが稀ではない。こうしたポリネシアの島世界におけるストリートの偏在は，19 世紀以降に集中的に進められたイギリス・フランスなどのヨーロッパ列強国による植民地支配体制確立の歴史過程にその淵源が求められる。ポリネシアの島世界における

ストリートの有無は，行政・交易・キリスト教布教・軍事において中核的寄港地としての役割を果たす港湾の建設に適した沿岸地形と，それに連接して建設される町や都市の存在に大きく左右されていたといえる。言うなれば，ある島にストリートを伴う近代の景観が産声をあげたのか否かという歴史過程の分岐は，島の沿岸地形・規模・立地に基づいて判断が下された植民者の地政学に負うものであった。つまり，ポリネシア世界には，物理的なストリート空間を伴って形成された近代の景観と，そうしたストリート空間を伴わずに形成された近代の景観がこれまで併走してきたということだ。

そもそも，ヨーロッパ近代の植民者たちは，大陸から海によって隔てられた太平洋の世界を孤立し隔絶した空間と捉えていた。ヨーロッパ人植民者にとって，海を介した中心と周辺の関係の認識は，地続きの空間における中心と周辺の関係の認識とは相当に異なるものであったと考えられる。島世界における中心と周辺は簡単に往来することができない海によって隔てられており，孤立と隔絶を運命づけられた島々が不連続に点在する景観として存在するものなのだという認識がそこにはあった（Connell and King 1999）。そして，ストリート空間を有するような植民都市を含んで景観が構成される島とそうではない周辺の小島嶼との間には，もう一段階さきのさらなる孤立と隔絶の関係が確信をもって想定されていた（cf. Macdonald 2001）。

2　ストリームの歴史認識

しかし，ここで，ポリネシアの海を介した島と島の関係を孤立と隔絶だけをキーワードにして一義的に理解することの是非を問う必要がある。ヨーロッパ近代が海の存在を絶望的な陸地の果て，あるいは行き場のない分断と隔絶の象徴と捉えていたのだとすれば，ポリネシアの島世界にはこれとは対極的な海の存在に対する理解があったと表現して誤りはないだろう。ポリネシアの島世界には，祖先たちが広大な海（*moana nui*）を巧みな航海術によって乗り切ることで「今のここ」が形成されたのだという，個別の島景観のローカル・スケールを越えたグローバルな移動と拡散の連続に基づく歴史認識が形成されてきた。

出生の地を出帆し，広大な海を移動しながら新たな人々に出遭い，その出遭いの経験を通じて新たな知識と技術を蓄え，さらに先にある島に向けて船出する。人跡未踏の島にたどり着けば，そこを新たなフロンティアとして生活世界の形成を図る。そして，新たなフロンティアに形成された生活世界の経験は，出生地からその地にたどり着くまでに経てきた経路と要衝の島々での経験につなぎ合わされる。さらに，新たなフロンティアは，自らの出生地を媒介にして，祖先たちによって累積されてきた移動・拡散の記憶ともつなぎ合わされる。それによって，「今のここ」と祖先の故地は海を介して不可分の連続的な景観を構成することになり，同時に，「今のここ」は海を介して「未来のど

こか」に果てしなく拡張していく可能性を有するものとしても理解されていく（棚橋 2005b）。

「今のここ」を出帆しようと企むものが現れ，さらに彼らがその先にある島にうまくたどり着けば，「今のここ」は祖先の故地のひとつへとその意味を転じる。海流と星座を読んで移動を繰り返しながら，ひろがりとつながりを希求する歴史がそこにはある。海上に展開するつながりとひろがりの思考の渦中においては，中心と周辺の固定化した関係の認識は融解せざるを得ない。このようなつながりとひろがりの思考を，仮にストリーム（stream，流れ）の歴史認識と呼ぶことができるだろう。このストリームの歴史認識は，ヨーロッパ近代の地政学の思考に基づいて個々の島を不連続な孤立と隔絶の世界と捉える周辺性の歴史認識とは対極的な様相を帯びている。つながりとひろがりの歴史認識においては，個々の島はひとびとがカヌーを駆って太平洋を往来する際の，文字通りの「交差点」の性格を有することになる。

そして，ストリームに乗って太平洋の島世界に進出し，移動・拡散を続けながら，行く先々の島を「交差点」に加えて干渉と交流を繰り返し，「海のフロンティア」を拓いてきたものたちの末裔が現在のポリネシア人たちなのであるという理解の仕方は，この四半世紀の間に当該地域における自己認識の作法としても強く意識されるに至っている。ポリネシア人たちの間では「海に生きるつながり」（seafaring connections）が文化的威信の核を成し，彼らが彼らとして今のように在ることに意味を与えている。このような文化的威信の現代的な覚醒のありかたに先鞭をつけたのは，1973 年にハワイで産声を上げたポリネシア航海協会（the Polynesian Voyaging Society）であった。同協会は 1976 年に大型の双胴カヌーであるホクレア号（Hokule‘a）を建造し，その後，このホクレア号を使ってポリネシア人の太平洋における移動・拡散の遠洋航海過程を再現・検証する「再発見の航海」を幾次にもわたって敢行し，これを成功させた（Finney *et al.* 1994）。ホクレア号の航海はハワイ系を中心とするポリネシア人だけでなく，ミクロネシア・サタワル島の伝統的航海技術の継承者や人類学者を含むヨーロッパ系の人々をも巻き込んだ共同作業の積み重ねのうえに実施されてきており，まさに「海に生きるつながり」の思考が存分に活かされたイベントであったといえるだろう。

また，一方では，20 世紀のポリネシアにおいて「海に生きるつながり」を想起する作業が改めて強く希求されることになった背景を考える必要がある。「海に生きるつながり」に基づくストリームの歴史認識とは対照的に，19 世紀以降のポリネシアの島世界はさまざまな政治体制の国と地域への分断を余儀なくされてきた。2008 年現在でみれば，英連邦下の立憲君主国（ニュージーランド，ツバル），英連邦下にあってニュージーランドと自由連合関係を有する地域ないし自治領（クック諸島，ニウエ，トケラウ），英連邦諸国と緊密な関係を維持する立憲君主国（トンガ王国，サモア独立国），アメリカ合衆国の州（ハワイ州）・同非併合海外領土（アメリカ領サモア），チリ共和国の

海外自治領（イースター島），フランスの海外領邦（フランス領ポリネシア）・同海外準県（ウォリス・フツナ），イギリスの海外領土（ピトケアン諸島）などなど，ポリネシアの各島嶼はそれぞれに多様な政治体制のもとにある。分断と多様性を特徴とするポリネシアの政治体制のモザイクのような現状は，当該地域に侵出したヨーロッパ列強による19世紀以降の植民地争奪戦と支配の結果であり，多くの場合に植民地支配を行う外部勢力への政治的屈従と抗しがたい経済的依存を伴うものであった（棚橋2005b）。ヨーロッパの近代法が導入されて土地や海などの資源に対する自律的な接近は制限され，島間に設定された植民地の境界線はひとびとの活動範囲を個別の島へと狭めていった。植民地支配の体制下では，ポリネシア人にとって海がもつ意味も島々を自由につなぐ媒介項から閉塞感を生みだす壁へと転じ，隔絶の象徴へと変質させられていった。島々をつなぐ遠洋航海の自由が奪われたために，この百数十年の間に「海に生きるつながり」は現実味を失い，忘却のかなたに押しやられてしまった。

しかし，1960年に国際連合総会で「植民地独立付与宣言」（Declaration on the Granting of Independence to Colonial Countries and Peoples）が可決されると，急激にとは言いがたいが，しかし着実に脱植民地化の世界的趨勢の影響がポリネシアの島世界にも浸透していった。1962年の西サモア（現サモア独立国）の独立を嚆矢として，1965年のクック諸島の自治権獲得などの出来事がそれに続き，ポリネシアにも脱植民地化をめざす政治＝社会改革の気運が高まりを見せていった。こうした政治＝社会改革をめざす動きは，19世紀後半にすでにホームランドにおいてマイノリティ化していたニュージーランドやハワイのポリネシア系住民の自決権獲得や主権回復に向けた意識の高揚とも共鳴しながら，ポリネシアの先住民族運動を顕在化する広範なうねりを形成していくことになった（Smith 1999）。

この一連の過程において，それまでの百数十年間にポリネシア人の日常生活を個別の島世界に縛りつけてきた植民地間の境界線の存在が，批判され否定されるべき対象のひとつとして前景化した。そこでは，ヨーロッパ近代の「文明化の使者たち」の手によって孤立した閉塞空間へと変貌してしまっていた島世界の現状から抜け出す方法として，「本来の」つながりとひろがりを生みだす海の存在の回復が求められたのである。先に触れたホクレア号の「再発見の航海」は，海の存在を回復するための具体的な第一歩として理解されよう。ホクレア号が蒔いた種は，「再発見の航海」に先立って1972年に始まった太平洋芸術祭（the Festival of Pacific Arts）にも後に影響を及ぼし，重要な実を結ぶことになった。太平洋芸術祭は4年に1度オセアニア各国・各地域の代表が結集して伝統的なものから現代的なものまでさまざまなパフォーマンスを繰り広げ，各地の美術・工芸の制作実演と展示を行う芸術交流の場であり，広くオセアニアの伝統文化の奨励と振興を図る祭典である。かつては南太平洋委員会（the South Pacific Commission）の，そして現在は，太平洋の22の国と地域が加盟する国際機関である太平洋共同体事務局人

間開発プログラム（Human Development Programme of the Secretariat of Pacific Community）の資金援助のもと，太平洋芸術協議会（the Council of Pacific Arts）が企画運営を行っている（Yamamoto 2006）。「海に生きるつながり」は太平洋芸術祭の継続的な主要テーマのひとつに採択されており，特に1992年にクック諸島ラロトンガ島で開催された第6回大会以降はポリネシアを中心に参加各国・各地域からカヌーが開催地に集結して「海に生きるつながり」を具体的に確認するイベントの実施が定例化している。こうしたイベントでは，遠洋航海の伝統がオセアニアの先住民文化の豊かさを示し，同時にオセアニア各所の人々をつないで結束と威信を高める重要な文化的象徴であることが強く意識されている（棚橋 1997）。

3 労働移民——もうひとつのストリームの歴史

19世紀以降のヨーロッパ列強国による植民地化が生みだした島世界の分断と隔絶化の歴史に抗するかたちで，1970年代以降，ポリネシア人たちは積極的に「海に生きるつながり」の歴史を想起してきたことをこれまでに確認した。しかし，「海に生きるつながり」を想起する作業が，ポリネシアの島世界を近代の権力空間の「周辺の周辺」（extreme periphery）の位置づけから救済し，一気呵成に現状を改変に導いたという楽観的な結末はそこにはない（Marcus 1981）。祭が終わった直後の淋しさが際だつように，「海に生きるつながり」という文化的威信回復のテーマが太平洋芸術祭などの祭典で喧伝されればされるほど，グローバル・スタンダードにおいてはポリネシアというローカルな場所が現在も権力空間の「周辺の周辺」としてのスティグマを負わされていながら，「中心」勢力とつきあい続けることを回避できずに「引き裂かれたまま」にあるという今日的状況が同時に際だってしまう（関根 2007）。関根の表現を借りれば，ポリネシアの島世界の「敗北したローカリティ」——「西洋に発した近代化，世俗化に押し流されて命脈を絶たれ解体されつつあるうえに，［グローバル市場に通用するようにパッケージ化された］「勝利するローカリティ」という再帰的近代化現象の輝きの陰にますます身を隠されてしまう，ローカルな生活文化の有り様——の問題系がここにある（関根 2007: 5）。

ポリネシアの島世界の「引き裂かれたまま」にある「敗北したローカリティ」の在り方を直截に示すのは，1960年代から頻発化する労働移民の存在であると言えるだろう。周辺の小島嶼からストリートを擁する地域の中心の島への出稼ぎ，そして，地域の中心の島からオークランド，ウェリントン，シドニー，メルボルン，ホノルル，ロサンゼルス，シアトル，ポートランド，サンチャゴなどの環太平洋地域の大都市圏への労働移民の流れによってかたちづくられるような，「海によってつなぎとめられた」もうひとつのストリームの歴史が存在する。先に述べたように，ポリネシアでは1960年代から脱

植民地化と自治権獲得の動きが進行して，形式的には随所で政治的な「独り立ち」が実現した。しかし，土地資源が限定されており，世界経済の中心からも隔てられた島世界の経済的な「独り立ち」は容易に実現し得ぬ目標であった。そのため，1960 年代以降，ホームランドの不安定な政治・経済状況を背景に，多くのポリネシア人がホームランドをあとにして環太平洋地域の大都市圏に出稼ぎ移住して生活基盤を確保する道を選択してきた（Bertram 1986）。皮肉にも，ローカルな場所の政治的な「独り立ち」の決断が，新たな次元での「中心」勢力との結びつきをつくりだし，「中心」勢力に対する経済的依存を年々高めたのである。

その結果，21 世紀の現在，ニュージーランドのオークランド市は世界で最も多くのポリネシア人に出遭える場所へと転じ，ニュージーランド・マオリとハワイ人を除くポリネシア人（Islanders, Island Polynesians）のほぼ 50 パーセントの人口がホームランドを離れて，ニュージーランド，オーストラリア，アメリカ合衆国ハワイ州および西海岸諸州，チリなどの大都市圏に定着して生活を営んでいる（Spickard *et al.* 2002）。また，ニュージーランドを例にとれば，2001 年現在，同国在住のサモア人 114,432 人の 58 パーセント，クック諸島人 52,356 人の 70 パーセント，トンガ人 40,713 人の 52 パーセント，ニウエ人 20,148 人の 69 パーセント，トケラウ人 6,204 人の 65 パーセントがホームランドではなくニュージーランドに生まれた出稼ぎ移民の第 2 世代以降であり，母語であるポリネシア系言語を日常的に操るものも激減している（Statistics New Zealand 2002; 棚橋 2005a）。そして，ホームランドに残るポリネシア人の日常生活も環太平洋地域の大都市圏に生活する同胞との間に張り巡らされた現金・物資・情報のネットワークのうえに維持されている。これも皮肉なことだが，このようなポリネシア人の離散によるホームランドの脱中心化＝再周辺化が進行するなか，例えば，太平洋芸術祭などのローカルな「伝統文化」の提示による文化的威信の回復とホームランドの再中心化を謳うイベントが開催される際には，海外在住の出稼ぎ移民のネットワークを通じた経済的・社会的バックアップが必要不可欠な要素となっている（棚橋 1997）。言うなれば，「海に生きるつながり」の想起に基づくストリームの歴史認識は，環太平洋地域の大都市圏とホームランドの関係性に由来する「引き裂かれたまま」に「海によってつなぎとめられた」もうひとつのストリームの歴史の現実に支えられながら今を迎えている。

4 「海続き」の光景と複視

こうした考えに至って，ポリネシアの島世界において関根が主張するところの「ストリート現象」を捉えるためにまず見据えるべき場が，島世界に偏在する物理的なストリート空間ではなく，海というストリーム空間なのだということに気づく（関根 2007: 5）。

ストリームの歴史認識において，海というストリームは生きられる社会空間を形成す

る中核に位置していた。しかし，今日，ストリームは，近代の権力空間の「周辺の周辺」に在る島世界のホームランドと環太平洋地域大都市圏という「中心」勢力の間にあって，このヘテロなものをつなぎとめる縁辺の位置に押しやられている。そして何より，海というストリーム空間に，「海に生きるつながり」の想起に基づくストリームの歴史認識と，「引き裂かれたまま」に「海によってつなぎとめられた」もうひとつのストリームの歴史の現実が居心地悪く交錯し続けるような境界領域が形成されている。

確かに，何気なく眺めれば，ホームランドと環太平洋地域大都市圏はストリームを介して1つの「海続き」の景観を構成している。ところが，「海を前にして海洋画を観る者の立場に身を置く」ような支配的な態度と視覚を捨て去りさえすれば（コルバン 2007: 73），ホームランドから見るストリームと，ひとたび「中心」勢力の磁場に降り立ってのち彼岸から改めて見るストリームとがいかに様相を異にするものなのかが見えてくる。そして，われわれは，輻輳することのない2つのストリームが波頭をぶつけあうさまに気づくことで，1つの「海続き」の景観のなかに，2つの光景を感得するような複視（double vision）の作法を手に入れることになる（Thomas and Losche 1999）。

現代オセアニア社会の主要なオピニオン・リーダーのひとりであるトンガ人人類学者エペリ・ハウオファは，人口の分散と経済的従属の現状を重視しながら，ホームランドの個別的伝統への拘りを捨て去り，南太平洋を広大なひとつの地域経済圏・文化圏として認識すべきだと主張した。彼は，人類学者がこれまで必死になって記録してきたローカルな「個別的伝統文化」は南太平洋では「貧民層のサブカルチャー」としてすでに周辺化しており，この地域のエリートに共有されるヨーロッパの言語・イデオロギー・物質文化・生活様式こそが現在の南太平洋を代表する文化なのだと言い放つ（Hau‘ofa 1987）。そして，彼は，島のローカル・スケールを越えた広大な海洋世界を移動しながら新たな知識と技術を体得してきたオセアニアの人々の姿が神話や伝説に語り継がれていることを想起する。そこに，古来より間断無くグローバルな視点で行動し，境界を越えて世界を構築してきた「我々」の姿があると彼は言う（Hau‘ofa 1993）。このハウオファの主張は極めて興味深いものだが，それはあくまでも「敗北したローカリティ」を「勝利するローカリティ」に転換しようとする試みであり，「歴史の勝利者の発想に与しない敗北者の微妙なあり方」（関根 2007: 4）を捉えようとする思考は介在していない。従って，「海続き」の景観にある2つの光景を喚起する内容を含みながらも，彼の主張には複視の作法を考えるうえでのヒントが一切潜んでいない。

ハウオファの主張ほど雄弁なものではないのだが，筆者が臨地調査を続けているクック諸島のある識者があるときに何気なくもらした「お前は道に出て，王になった」（*Rangatira kitea ara*）というラロトンガン・マオリ語の格言がある。「道」（*ara*）とは陸上の道のことでもあるが，この語には，島を離れて広大な海に乗り出していく「海の道」（*ara moana*）すなわちストリームの存在が同時に含意されている。「道」に出ることで，

人は過酷な経験をし，別の島にたどり着いて他者とも出遭う。他者との出遭いの経験を自己に内在化して取り込みながら「道」の経験は生きられる。そして，あるとき，「道」に出たものは成長して「王」となって海から帰還する。

「ストリート現象」を捉えようとする関根の「ストリートの人類学」の構想にある「縁辺から全体社会を見定めなおす必要があるとする方法論的視座」（関根 2007: 3）の提唱に照らすとき，このクック諸島の格言にある「道」の思想に複視の作法の可能性を見いだすことができるのではないかと筆者は考えている。

文　献

Bertram, G.

1986 ‘Sustainable Development’ in Pacific Microeconomies. *World Development* 14 (7): 809–822.

Connell, J. and R. King

1999 Island Migration in a Changing World. In R. King and J. Connell (eds.) *Small Worlds, Global Lives: Islands and Migration*, pp. 1–26. London and New York: Pinter.

コルバン，A.

2007 『空と海』小倉孝誠訳，東京：藤原書店。

Finney, B. R., *et al.*

1994 *Voyage of Rediscovery: A Cultural Odyssey through Polynesia*. Berkeley: University of California Press.

Hau‘ofa, Epeli

1987 The New South Pacific Society: Integration and Independence. In A. Hooper *et al.* (eds.) *Class and Culture in the South Pacific*, pp. 1–15. Suva: University of the South Pacific.

1993 Our Sea of Islands. In V. Naidu, E. Waddell and E. Hau‘ofa (eds.) *A New Oceania: Rediscovering Our Sea of Islands*, pp. 2–16. Suva: School of Social and Economic Development, University of the South Pacific.

Macdonald, B.

2001 *Cinderellas of the Empire*. Suva: Institute of Pacific Studies, University of the South Pacific.

Marcus, G. E.

1981 Power on the Extreme Periphery: The Perspective of Tongan Elites in the Modern World System. *Pacific Viewpoint* 22 (1): 48–64.

関根康正

2007 「ストリートという縁辺で人類学する――「ストリートの人類学」の提唱」『民博通信』116: 2–6。

Smith, L. T.

1999 *Decolonizing Methodologies: Research and Indigenous Peoples*. Dunedin: University of Otago Press.

Spickard, P., J. L. Rondilla and D. H. Wright (eds.)
2002 *Pacific Diaspora: Island Peoples in the United States and across the Pacific*. Honolulu: University of Hawai‘i Press.

Statistics New Zealand
2002 *2001 Census of Population and Dwellings: Ethnic Groups*. Wellington: Statistics New Zealand.

棚橋　訓
1997「MIRAB 社会における文化の在り処――ポリネシア・クック諸島の文化政策と伝統回帰運動」『民族学研究』61（4）: 567–585。
2005a「マオリ――先住民マオリと移住民ポリネシア人」前川啓治・棚橋訓編『オセアニア』（講座世界の先住民族――ファースト・ピープルズの現在 09）pp. 162–175，東京：明石書店。
2005b「解説　オセアニア島嶼部」前川啓治・棚橋訓編『オセアニア』（講座世界の先住民族――ファースト・ピープルズの現在 09）pp. 178–189，東京：明石書店。

Thomas, N. and D. Losche
1999 *Double Vision: Art Histories and Colonial Histories in the Pacific*. Cambridge: Cambridge University Press.

Yamamoto, M.
2006 The Eighth Festival of Pacific Arts: Representation and Identity. In M. Yamamoto (ed.) *Art and Identity in the Pacific: Festival of Pacific Arts*, pp. 5–27. Osaka: JCAS, National Museum of Ethnology.